

研究種目：若手研究(B)  
研究期間：2007～2010  
課題番号：19760448  
研究課題名(和文) 京都の伝統的木造建築に用いられた木材に関する調査・研究—材種・用法・流通について  
研究課題名(英文) Research and investigation on timber used for traditional wooden building in Kyoto – on the kind of wood, the usage, and historical circulation  
研究代表者  
松田 剛佐 (MATSUDA KOUSUKE)  
京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・助教  
研究者番号：20293988

研究分野：日本建築史

科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠

キーワード：(1) 建築史・意匠 (2) 建築生産 (3) 近世林業史 (4) 木材流通  
(5) 木材規格

#### 1. 研究計画の概要

本研究は、建築材料として用いられた木材に注目して、その用法を具体的に把握することに主眼がある。そして、その知見をもとに、建築材料としての木材を、建築史の視座の中で体系的にとらえようと試みるものである。木材と伝統的な建物との関係には、それが選択された理由をはじめとして、どのように用いられてきたのか、また、建築材料としてどのように生産・流通していたのかなど、未検証な部分が多くある。この解明が、本研究の基盤である。本研究の実行過程は、次の4つの段階に分けることができる。すなわち、

A. 文献と遺構の調査による、伝統的建築における木材の使用状況の実態調査；近世の古文書を調査し、住宅関係の記載箇所から、木材の使用状況を抽出・整理し検討する。

B. 史(資)料調査を主とする歴史的背景の分析；京都府及び周辺の遺構調査を行う。

C. 木材の生産・流通体制の分析；白鳥方歴代記の分析を進めるとともに、徳川林政史研究所所蔵文書などから、同様の近世の海運・湊の史(資)料を探索し、京都に搬入された木材の状況を調査・分析する。

D. 以上を体系的に整理、である。

#### 2. 研究の進捗状況

(1) 平成 19 年度；「白鳥材木役所関係史料から見た近世の木曽材の産出状況および材種と規格について」として、「白鳥材木役所」に関係する史料を通して、近世後期の木曽材の産出状況と、材種と規格について研究した。近世の木材を産出していた林業に関する史

的研究は、林業経済史的視点からの研究として、所三男氏による『近世林業史の研究』(吉川弘文館、1980)が代表的であり、「白鳥材木役所」の概要が、林政政策を軸にして通覧され分析されるとともに、木材の処分に関しても、史料の確認されうる万治二年(1659)から寛文元年(1661)の3年間と、寛文九年(1669)から延宝四年(1676)の8年間に関して、経済史的視点から詳細に検討されている。このほかにも徳川林政史研究所の成果に代表されるように、木曾に関しては既往研究の蓄積が豊富である。既往研究を有効に参照できることもあり、また木曽材は京都にも多く流通されているため、当研究の端緒として木曽材を管轄する「白鳥材木役所」関連の史料によって研究をすすめ、19世紀の木曽材の生産状況として、材種・規格の概略を明らかにした。

(2) 平成 20 年度；「近世(18世紀中期)の木曽材の規格について」として、18世紀中期の木曽材の規格について、徳川林政史研究所の所蔵になる尾張藩「白鳥材木役所」関連史料を更に研究した。木曽材の規格の詳細について、これら史料に拠ることで、18世紀中期頃の状況を整理・分析し、表として纏めることができた。すなわち、樹種は檜が主体であること。柚取り時点で規格化されたこと。建築構造材になりうる長材は一丈三尺の「二間」が規格寸法の基準となっていたこと。樽木の生産に比重が置かれていたこと。林政改革を反映して「小物」の産出に力が入れられつつあったこと、が結論づけられた。

(3) 平成 21 年度；林業分野の先行研究が多い木曾以外は先行研究が乏しい中で、「近世の建築材料としての木材の生産状況について－皇室御料、公家領、社寺領に関する林政史関連史料から」として、木曾材に留まらず、広く林政史関連史料から、近世の建築材料としての木材の生産状況を研究した。すなわち、皇室御料、公家領(二條家領)、社寺領(伊勢皇大神宮領、賀茂別雷神社領、日光東照宮領、延暦寺領、園城寺領、金剛峰寺領)と、全国の林野の性格を大きく3種に分類して、それぞれに関して研究を進めた。これによって、各領地の木材生産は、大体において私的な性格を残した荘園的なものであったこと。そのなかで、払い下げや請山といった商活動に関連する木材生産が散見されること、が結論づけられた。また、それぞれの山林の伐木の概要から、植生状況といった近世の山林環境の推測も行った。

(4) 上記(3)の研究を進める中で、皇室御料である黒田村には早くから商業資本が参入したことや、大嘗会関連の用材に関する詳細が明らかになった。また、(1)、(2)からは、木材の規格化は、建設現場すなわち消費段階でなされるというよりも、山林からの伐木すなわち生産段階で既に行われていることが明らかになった。このような研究成果が得られたことは、本研究を展開してゆく上での新知見として有意義なものである。平成 22 年度は、この3年間の研究によって新たに獲得された視点をもとにして、さらに研究を進める予定である。

### 3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

(理由)

当初は、木材の消費状況に注目することで研究を進める方針であり、上記「1. 研究計画の概要」で示した計画段階のA～Cを同時に進行していた。しかしAとBの研究対象は膨大であり、総合的な成果に纏めるのが困難に思われたのであるが、Cを進行する中で、思いがけずA、Bに強く影響する研究成果が得られた。すなわち、木材規格を消費・流通状況から帰納的に研究するとして当初の方針よりも、困難と思われていた生産状況から研究する方が、逆に演繹的な視点が得られることが明らかになってきた。換言すると、使用木材に対しての個別事例の分析から始めることが多かったこれまでの類例研究に対して、あまり注目されてこなかった林政・林業史から研究することで、木材生産に対する演繹的な視点が獲得され、より総合的な成果が得られうるという新知見が得られた。本研究を推進することで、木材生産の史的 연구に新たな成果を獲得しうるものと思われる。

### 4. 今後の研究の推進方策

多くの先行研究に準じて消費状況から研究するとして当初の研究計画では、上記の計画段階A、Bの対象となる史料・遺構が膨大となり、Dの総合的な研究視点の獲得が困難かと思われた。しかし研究をすすめることで、生産地からの木材産出状況から研究することによって、流通・消費の史的な流れがより明確になるという、これまであまりなかった視点が獲得できた。すなわち、上記Cを進めることで、A、Bの研究がより明確なものとなりうるという展望が開けた。このため、継続してCを重点的に推進・展開する。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 松田剛佐、「近世の建築材料としての木材の生産状況について(2)－飛騨国の御用材と丹波国の商人材に関して」、日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸)、査読無、F-2巻、2010年掲載確定
- ② 松田剛佐、「近世の建築材料としての木材の生産状況について－皇室御料、公家領、社寺領に関する林政史関連史料から」、日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)、査読無、F-2巻、2009年、pp.541-542
- ③ 松田剛佐、「近世(18世紀中期)の木曾材の規格について」、日本建築学会大会学術講演梗概集(中国)、査読無、F-2巻、2008年、pp.37-38
- ④ 松田剛佐、「白鳥材木役所関係史料から見た近世の木曾材の産出状況および材種と規格について」、日本建築学会大会学術講演梗概集(九州)、査読無、F-2巻、2007年、pp.111-112

[学会発表] (計4件)

- ① 松田剛佐、「近世の建築材料としての木材の生産状況について(2)－飛騨国の御用材と丹波国の商人材に関して」、日本建築学会、2010年9月発表確定、富山大学
- ② 松田剛佐、「近世の建築材料としての木材の生産状況について－皇室御料、公家領、社寺領に関する林政史関連史料から」、日本建築学会、2009年8月29日、東北学院大学
- ③ 松田剛佐、「近世(18世紀中期)の木曾材の規格について」、日本建築学会、2008年9月18日、広島大学
- ④ 松田剛佐、「白鳥材木役所関係史料から見た近世の木曾材の産出状況および材種と規格について」、日本建築学会、2007年8月30日、福岡大学